

北海道湧別町  
川西オホーツク遺跡発掘調査概報  
(2024年)



高瀬 克範 編

北海道大学考古学研究室

2025



## 目次

|                |      |
|----------------|------|
| 例言             | ／ 1  |
| 凡例             | ／ 1  |
| 第 1 章 調査の目的と方法 | ／ 2  |
| 第 2 章 調査結果     | ／ 8  |
| 第 3 章 まとめと展望   | ／ 15 |
| Summary        | ／ 16 |
| 引用文献           | ／ 17 |
| 写真図版           | ／ 18 |
| 報告書抄録          | ／ 21 |

## 表目次

|           |      |
|-----------|------|
| 表1 周辺の遺跡  | ／ 5  |
| 表2 出土遺物一覧 | ／ 14 |

## 図目次

|  |      |               |      |
|--|------|---------------|------|
| 図 1 川西オホーツク遺跡の位置 (1) (国土地理院<br>電子地形図 25000 をもとに作成) | ／ 2  | 図 8 出土遺物 (1)  | ／ 11 |
| 図 2 川西オホーツク遺跡の位置 (2) (国土地理院<br>基盤地図をもとに作成)         | ／ 3  | 図 9 出土遺物 (2)  | ／ 12 |
| 図 3 周辺の遺跡 (北海道教育委員会「北の遺跡案<br>内」より)                 | ／ 4  | 図 10 出土遺物 (3) | ／ 13 |
| 図 4 遺跡周辺の地形 (国土地理院治水地形分類図<br>「中湧別」)                | ／ 6  |               |      |
| 図 5 2024 年度調査位置 (青柳編 1995 をもとに<br>作成)              | ／ 9  |               |      |
| 図 6 2024 年度測量結果                                    | ／ 10 |               |      |
| 図 7 TP1 および TP2 セクション図                             | ／ 10 |               |      |

## 写真図版目次

|       |      |
|-------|------|
| 写真図版1 | ／ 18 |
| 写真図版2 | ／ 19 |
| 写真図版3 | ／ 20 |



# 川西オホーツク遺跡発掘調査概報(2024年)

## 例 言

1. 本書は、北海道紋別郡湧別町川西 516 番地に所在する川西オホーツク遺跡の発掘調査概報である。
2. 本遺跡の北海道埋蔵文化財包蔵地台帳の登録番号と、本調査において採用した遺跡略号は、次のとおりである。  
登録番号 I-21-032  
調査略号 KOK
3. 本遺跡の発掘調査は、北海道大学大学院文学研究院考古学研究室が行った。
4. 野外調査の期間、調査面積、調査主体などは次のとおりである。  
【野外調査期間・調査面積】  
2024年8月12日～8月16日 調査面積約 2 m<sup>2</sup>  
【調査主体】北海道大学大学院文学研究院 研究院長 川端康弘  
【発掘担当者】  
北海道大学大学院文学研究院 教授 高瀬克範
5. 出土遺物の整理は調査参加者で分担して実施し、本書の編集・執筆は高瀬克範が行った。
6. 発掘調査の参加者は下記の通りである。  
高瀬克範、國木田大（以上、北海道大学教員）、柴野初音、松浦愛梨、松本航太（以上、北海道大学大学院生）、小倉理真子（以上、北海道大学学部生）。
7. 発掘調査および本概報の作成にあたり、下記の方々と機関にお世話になった。記して感謝申し上げる（五十音順、敬称略）。  
阿部 勉、伊藤 齊、坂本雄仁、中島一之、林 勇介、北海道教育委員会、湧別町教育委員会。
8. 出土遺物および野外調査時に作成した図面類は、最終報告書刊行まで北海道大学大学院文学研究院考古学研究室で保管し、その後、湧別町教育委員会に返却する予定である。
9. 本書は、科学研究費補助金・基盤 A(23H00010)、基盤 B(23K20512)、基盤 B(23K25386) の研究成果の一部である。

## 凡 例

1. 層名の記載、土層注記の方法は第 1 章第 3 節 3 項のとおりである。

2. 測量図における高さは、標高を使用した。
3. 測量図における北は真北である。現地で設定したグリッドの南北ラインの設定には磁北を利用した。
3. ポータブル GPS による基準点の座標（緯度、経度、世界測地系）は下記の通りである。より正確な座標は最終報告書に盛り込む予定である。  
P1 N44° 14' 09.19" E143° 34' 33.50"  
P2 N44° 14' 09.34" E143° 34' 33.25"
4. 遺物の掲載基準  
3 次元モデルから取得した図を本書に提示した遺物は、下記の基準により選択した。  
【土器】口縁部破片と文様が確認される破片全点。そのほか胴部破片などでも、接合により一定以上の大きさになったものは適宜追加した。  
【剥片石器】ツール全点。その他の黒曜石製剥片も一定の大きさ以上のものは適宜追加した。  
【礫石器】使用痕の有無にかかわらず、最大長もしくは最大幅が 5 cm 以上の資料全点。

## 第1章 調査の目的と方法

### 第1節 遺跡の研究履歴と調査の目的

湧別町川西オホーツク遺跡は、湧別町川西に位置する(図1, 2)。現在の海岸線からは直線距離にして約1.2kmで、湧別川の河口部付近で合流するセンサイ川左岸の河岸段丘上に立地している。

この遺跡は、米村喜男衛によって1960年にはじめて発掘調査が行われた(米村1981, 網走市郷土博物館編1990)。当時の「川西遺跡」には現在のシブノツナイ竪穴住居群から川西オホーツク遺跡にかけての複数の包蔵地が含まれるものと考えられる。現在の川西オホーツク遺跡は、「川西遺跡」のなかの「伊藤地点」と呼ばれていた。

米村は3日間の調査で、オホーツク文化の竪穴建物である「第1, 2号竪穴」、擦文文化の竪穴建物である「第3号竪穴」を発掘した。第1号(9.1m x 7.3m)と第2号(規模不明)のふたつの住居跡は焼失住居である可能性が考えられており、2号竪穴の床面付近からは著名な「熊の丸彫りとシャチ鯨の胴部より上方の丸彫り」が発見されている(網走

市郷土資料館1990)。概報により、本遺跡はオホーツク文化(貼付文期)や擦文文化の集落であることは推定できるが、いずれの時期についても測量図や詳細な記述がなく、遺跡の内容には不明な部分が多く残されていた(米村1981, 網走市郷土博物館編1990)。

このため、北海道立北方民族博物館が1991年から1993年にかけて遺跡全体の測量図を作成するとともに、地表面で確認できる竪穴建物跡に新たに遺構名を付したうえで第1~4, 6~10号竪穴の発掘調査を実施した(青柳1992, 1994a, 1994b, 1995)。このうち第2, 3, 4, 8号住居は完掘され、1, 6, 7, 9, 10号は一部のみが調査された。その結果、オホーツク文化期の集落は貼付文期に位置づけられることが改めて確認されるとともに、多くの骨角器、動植物遺存体もえられ、遺跡の年代、性格、生業などについての理解が深まった(小林1995, 西本1995, 吉崎1995, 種石2015, 2018)。

しかし、米村が調査した擦文文化の住居は依然として特定されておらず、この遺跡における擦文文化期の集落の理解にはほとんど進



図1 川西オホーツク遺跡の位置(1)(国土地理院電子地形図25000をもとに作成)

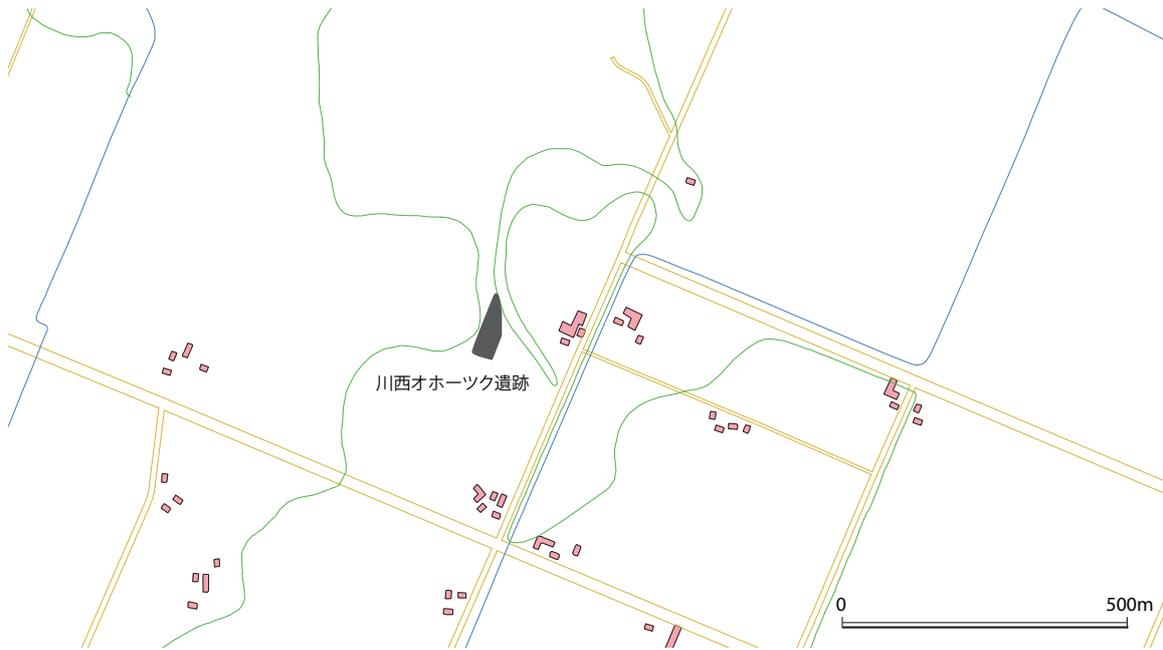


図2 川西オホーツク遺跡の位置(2)(国土地理院基盤地図をもとに作成)

展がみられていないのが実情である。1992年の発掘においてオホーツク文化期との予測のもとで発掘された4号竪穴は、調査の結果、方形の平面形を呈することが判明した。このため、擦文文化に位置づけられる可能性が極めて高いが、報告では「遺物、柱穴、カマドなどは確認することはできなかった。擦文文化期の竪穴と思われるが、確証は得られなかった。」(青柳編 1995:31)とされている。この遺跡では、調査記録がこの唯一の擦文文化の竪穴建物跡と考えられるものの、その年代を裏付ける証拠はまだえられていないのである。ただし、その後の記録類の調査によって、この遺構からはカマドの袖や焼土の可能性のある痕跡が確認できる写真が残っていることも指摘されている(種石 2020)。したがって、この遺跡ではやはり擦文文化の住居が存在する可能性は確実視できるが、年代や遺構に伴う遺物については新しい情報がほとんど増えておらず、詳細は不明のままである。

一方で近年、川西オホーツク遺跡に近接するシブノツナイ竪穴住居群の調査が進展し、530基におよぶ竪穴建物跡がすべて擦文文化期の所産と推定され、やはり近接する川西2遺跡の竪穴群もまたその時期に属する可能性が高いことが明らかになってきている(北海道立埋蔵文化財センター 2015, 2016, 2017, 2018, 2019, 2020, 2021, 湧別町教育委

員会 2019, 2020, 2021, 2022, 2023)。

これらの集落跡は川西オホーツク遺跡とも有機的な関係があったと推定され、今後、3つの集落遺跡をあわせた竪穴群全体の評価が北海道島東部の擦文文化の理解にあたって重要な意味を持つてくると予測される。しかしながら、川西オホーツク遺跡における擦文集落の情報の欠落がこの遺跡群の総合的な理解の障壁となっている。

こうした研究状況を踏まえ、北海道大学考古学研究室は川西オホーツク遺跡における擦文集落の内容を解明することを目的として、2024年から数年間をかけて発掘調査を行うこととした。主たる対象は、遺構の保存状態が良好と考えられる第28号竪穴である(図5)。より具体的な調査の目的は、下記のとおりである。

- 1) 土器の型式論的検討、放射性炭素年代測定から、川西オホーツク遺跡における擦文集団の居住年代を明らかにする。
- 2) 出土動物遺体から狩猟漁労活動の内容を解明するとともに、その同位体分析により当時の海洋生産性を明らかにする。
- 3) 出土炭化種子から当時の植物利用や雑穀農耕の有無、およびその入手経路や育成技術を明らかにする。
- 4) 土器付着炭化物の同位体分析や土器胎土の脂質分析から、当時の食生活を復元する。



図3 周辺の遺跡(北海道教育委員会「北の遺跡案内」より,  
<https://kitano-iseki.maps.arcgis.com/apps/webappviewer/index.html?id=748430b778a04092afe4c92656474bec>)

- 5) 土器付着炭化物内の微化石や残留デンプンから、当時の植物利用を解明する。
- 6) レプリカ法により、当時の植物利用を解明する。
- 7) 将来的な環境 DNA 分析や胆汁酸分析などの理化学的な分析のために、遺構内外から土壌サンプルを採取する。
- 8) 2) ~ 7) を通して擦文文化が北海道東部に拡散した要因を考察するための情報をえる。
- 9) 人工遺物(とくに土器、土製品)からみた他地域との関係を明らかにする。
- 10) 遺構(とくに竪穴建物跡)の建築技術からみた他地域との関係を明らかにする。
- 11) 火災住居の場合、建築材からみた建築方法や木材利用の特徴を解明する。
- 12) 礫石器の表面とそれらが埋没していた土の中の微化石や残留デンプンの検出・比較検討を通じて、当時の植物利用を明らかにする。
- 13) 本遺跡のオホーツク文化の石器利用について、既存の発掘資料もあわせて使用痕分析によって明らかにする。

## 第2節 周辺の遺跡

湧別町内では、旧石器時代から考古学的アイヌ文化期にわたる埋蔵文化財包蔵地が57箇所確認されている。図3には、このうち川西オホーツク遺跡周辺の包蔵地を、一部紋別市域の包蔵地も含めて図示した。また、表1には、図3に含まれている包蔵地のうち湧別川よりも西側に位置する湧別町内の包蔵地、およびシブノツナイ湖に近接する紋別市域の包蔵地にかかわる台帳上の基本情報を掲示した。

シブノツナイ湖周辺の段丘上には、縄文早期~中期の包蔵地(シブノツナイ、シブノツナイ2、沼の上1遺跡)があるほか、シブノツナイ湖の湖底にシブノツナイ湖底西遺跡(縄文早期・中期)が存在するなど、縄文文化前半期の包蔵地が複数分布している。

センサイ川などの小河川がかつて蛇行していたシブノツナイ湖と湧別川左岸のあいだには(図4)、低位の河岸段丘上にオホーツク文化や擦文文化の包蔵地が確認されてきている。竪穴建物跡が地表面から凹みとして認識できる包蔵地が近接しているのが特徴であり、シブノツナイ竪穴住居群で計530基、川西2遺跡で計102基の竪穴建物跡の存在が想定さ

表1 周辺の遺跡

| 包蔵地名        | 登載番号     | 住所   | 種別    | 時期・文化                  | 立地                     | 標高        | 出土遺物                   |
|-------------|----------|--|-------|------------------------|------------------------|-----------|------------------------|
| 川西オホーツク遺跡   | I-21-032 | 湧別町川西 516  | 集落跡   | オホーツク                  | 湧別川の支流古川の開析で残置した小独立丘上  | 5m        | 土器, 石器, 骨器             |
| 川西遺跡        | I-21-034 | 湧別町川西 604  | 集落跡   | 不明                     |                        |           | 土器, 石器                 |
| 川西 2 遺跡     | I-21-056 | 湧別町川西 501-1, 508, 509  | 集落跡   | オホーツク, 擦文              | 湧別川支流古川左岸の河岸段丘上        | 7-9m      |                        |
| シブノツナイ堅穴建物群 | I-21-035 | 湧別町川西 499-1・2, 502-1・2, 503, 506-1・2, 714, 717 ~ 720, 722-1 ~ 3, 930, 1056, 1059-1 | 集落跡   | 縄文, 続縄文, オホーツク, 擦文     | オホーツク海とシブノツナイ湖を望む海岸段丘上 | 5m        | 土器, 紡錘車, 石器            |
| シブノツナイ遺跡    | I-21-033 | 湧別町信部内 37  | 集落跡   | 縄文(前期), 縄文(中期), 擦文     | シブノツナイ川右岸の段丘上          | 5 m 前後    | 土器, 削器, 剥片, 石斧         |
| シブノツナイ遺跡    | I-21-055 | 湧別町信部内 587, 6138-5   | 遺物包含地 | 縄文(早期), 縄文(前期), 縄文(中期) | シブノツナイ川右岸の段丘上          | 7 ~ 9m ほど | 土器, 石鏃, スクレイパー, 剥片, 石斧 |
| シブノツナイ湖底西遺跡 | I-03-067 | 紋別市沼の上 110 番地(湖底)  | 湖底遺跡  |                        |                        |           | 縄文(早期), 縄文(中期)         |
| 沼の上 1 遺跡    | I-03-045 | 紋別市沼の上 70, 71, 75, 77  | 遺物包含地 | 縄文                     | シブノツナイ湖西岸の微高地          | 4 m       | 石槍, 剥片                 |
| 沼の上 2 遺跡    | I-03-046 | 紋別市沼の上 482-1・2, 483-1 ~ 4, 485, 491-1・2  | 遺物包含地 | 縄文(中期)                 | シブノツナイ川左岸段丘            | 10 m      | 土器                     |

れている(北海道埋蔵文化財センター 2015, 2016, 2017, 2018, 2019, 2020, 2021, 湧別町教育委員会 2019, 2020, 2021, 2022, 2023)。これらの多くは擦文文化期の所産であることが、北海道埋蔵文化財センターや湧別町教育委員会による上記の調査で明らかになってきている。

これに対して、地表面で 50 基の堅穴建物跡が確認される川西オホーツク遺跡では、擦文文化に加えてオホーツク文化の堅穴建物が含まれることがすでに明らかになっている。しかし、近隣の遺跡とは対照的に、擦文文化の遺構・遺物については従来の調査でえられてきた情報はきわめて少ない(網走市郷土資料館 1990, 青柳編 1995)。

米村喜男衛による 1960 年の調査を川西オホーツク遺跡の第 1 次調査(米村 1981, 網

走市郷土博物館編 1990)、北海道立北方民族博物館による 1991 ~ 93 年の調査を第 2 次調査とすると(青柳編 1995)、2024 年からの北海道大学考古学研究室による調査は第 3 次調査とよぶことができる。第 3 次調査においては、すでに多くの情報が収集されてきているオホーツク文化期ではなく、擦文文化期の川西オホーツク集落に着目する。

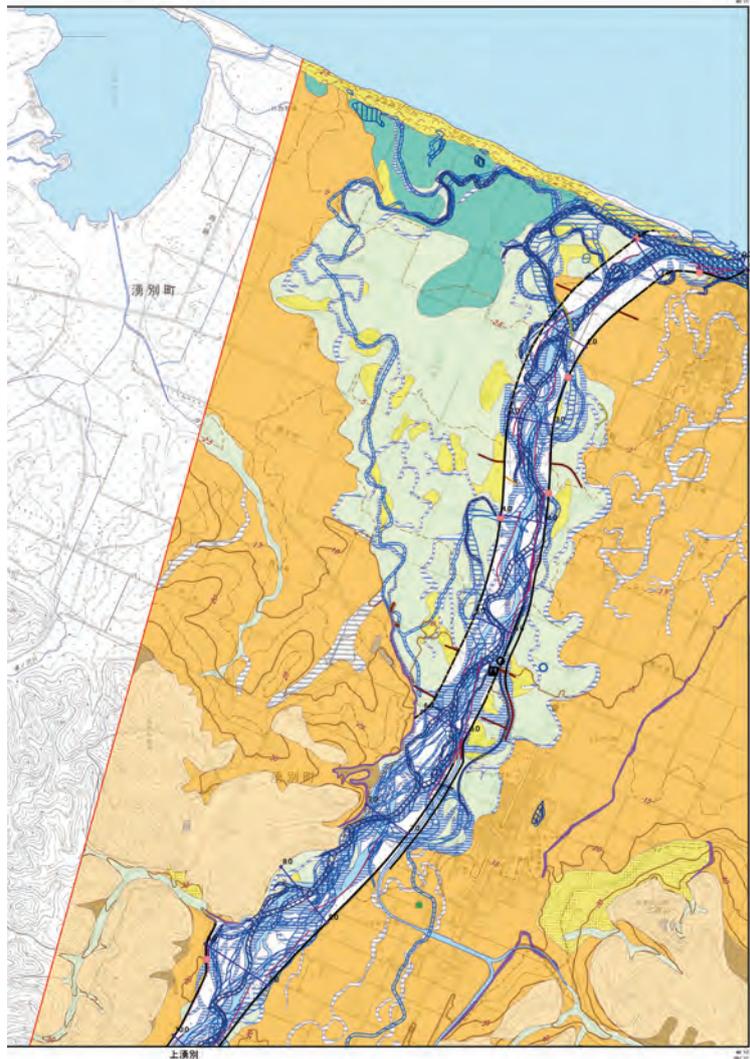
### 第 3 節 発掘調査の方法

#### 1. 調査区の設定と測量調査

2024 年は、将来的に発掘調査を予定している第 28 号堅穴の周辺に測量用の杭を設定した。グリッドの設定にあたっては磁北(真北より 9.74° 西偏)を用いて南北軸を決定した

# 中湧別

国土地理院技術資料 D1-No.913



### 凡例

| 大分類     | 中分類      | 小分類       | 細分類              | 記号                  |                     |  |
|---------|----------|-----------|------------------|---------------------|---------------------|--|
| 山地      |          |           |                  |                     |                     |  |
| 台地・段丘   |          | 段丘頂       |                  |                     |                     |  |
|         |          | 崖(段丘崖)    |                  |                     |                     |  |
|         |          | 深い谷       |                  |                     |                     |  |
| 低地      | 山麓堆積地形   |           |                  |                     |                     |  |
|         |          | 扇状地       |                  |                     |                     |  |
|         | 氾濫平野     | 氾濫平野      |                  |                     |                     |  |
|         |          | 後背湿地      |                  |                     |                     |  |
|         | 扇状地・氾濫平野 | 埋高地(自然堤防) | 旧河道              | 旧河道(明確)             |                     |  |
|         |          |           |                  | 旧河道(不明瞭)            |                     |  |
|         |          |           | 荒堀               |                     |                     |  |
|         |          | 砂州・砂丘     |                  |                     |                     |  |
| 人工改変地形  |          | 干拓地       |                  |                     |                     |  |
|         |          | 盛土地・埋立地   |                  |                     |                     |  |
|         |          | 切土地       |                  |                     |                     |  |
|         |          | 連続盛土      |                  |                     |                     |  |
| その他の地形等 |          | 天井川の区間    |                  |                     |                     |  |
|         |          | 親河道・水堀    | 旧流路              | 5,300年代後半～5,400年代前半 |                     |  |
|         |          |           |                  | 5,300年代             |                     |  |
|         |          |           | 7,000年～5,000年    |                     |                     |  |
|         |          |           | 4,000年～1,000年    |                     |                     |  |
|         |          | 地盤高線      | 主曲線              |                     |                     |  |
|         |          |           | 補助曲線             |                     |                     |  |
|         |          | 河川管理施設等   | 旧堤防              | 旧堤防                 | 5,300年代後半～5,400年代前半 |  |
|         |          |           |                  |                     | 5,300年代             |  |
|         |          |           | 河川管理施設(許可工作物も含む) | 完成堤防                |                     |  |
| 暫定堤防    |          |           |                  |                     |                     |  |
| 堤岸      | 暫々定堤防    |           |                  |                     |                     |  |
|         | 河川工作物    | 水位観測所     | ▲                |                     |                     |  |
|         |          | 流量観測所     | ▢                |                     |                     |  |
|         |          | 水質観測所     | ○                |                     |                     |  |
|         |          | 雨量観測所     | ◇                |                     |                     |  |
|         |          | 樋門・樋管     | ■                |                     |                     |  |
|         |          | 水門・閘門     | ■                |                     |                     |  |
|         |          | 排水機場      | ■                |                     |                     |  |
|         |          | 事務所・出張所   | ●                |                     |                     |  |
|         |          | 出張所       | ●                |                     |                     |  |
|         |          | 距離標       | ●                |                     |                     |  |
|         |          | 測線        | —                |                     |                     |  |

1:25,000  
0 250 500 1,000 1,500 2,000 m  
平成30年12月作成 国土地理院

図4 遺跡周辺の地形(国土地理院治水地形分類図「中湧別」)

のち、第 28 号竪穴を取り囲むように 4m 四方のグリッドを設定した(図 5)。X 軸は西から、Y 軸は南からそれぞれ 01, 02, 03・・・と命名し、グリッドの位置は X-Y の位置を組み合わせるとして 01-01, 01-02, 01-03・・・などと表記する。

図 5 では、北海道立北方民族博物館が第 2 次調査時に作成した遺跡全体の測量図に第 3 次調査の測量結果をあわせて表示した。ただし、第 2 次調査時の測量杭は残存していないと考えられることから(少なくとも 2024 年 8 月の調査時点では現地において確認できていない)、厳密な意味での図の合成は不可能である。したがって、図 5 はあくまでもおおまかな位置関係を表示しているにすぎない。

なお、図 5 では、第 2 次調査時に遺構名が付されていない地表面の凹みに、すべて番号を付してある。第 2 次調査では第 1～10 号までの遺構名が利用されていたため、ここでは第 11 号以降の番号を未命名の竪穴建物に割り当てた。その結果、本遺跡では第 50 号竪穴までが確認された。

2024 年度の野外調査前の包蔵地は、クマザサが密集して繁茂し、地面には多くの倒木や落木がみられた。現地表面の測量調査に先立ち、まず草払機によって、包蔵地の中央部の草刈りを行ったのち、人力で倒木・落木を除去した。その後、上記の手法で設定したグリッドとの相対的な位置関係を利用して、トータルステーションで調査対象範囲内の地表面の

X, Y, Z 値を記録した。取得したデータをもとに、米国 Golden Software 社 Surfer 17 により地形図を作成した。

## 2. 試掘坑の発掘と遺物の取り上げ

第3次調査では、2025年度以降に第28号竪穴の発掘調査を計画している。2024年度は竪穴建物がない場所における基本層序を確認することを目的として、第28号竪穴の西北側および第32号竪穴の西側に、それぞれ TP1, TP2 と名付けた試掘坑 (1m x 1m) を設定し、地山と考えられる「ローム」層まで掘削を行った。

試掘坑の平面的な位置はトータルステーションで記録し、断面は写真撮影ののち手書きの実測図 (10分の1) を作成した。写真撮影には 1800 万画素以上のデジタル一眼レフカメラをもちいた。

試掘時に出土した遺物の詳細な位置は記録せず、層位のみを記録してとりあげた。試掘坑内では遺構は検出されなかったため、フローテーションなどに供する土壌サンプルも採取していない。

## 3. 土層の注記方法

- a. 色 『新版標準土色帳』(小山・竹原 1967) にしたがった。
- b. 土性 肉眼での観察および自らの接触・掘削にもとづき、構成物質の土砂の粒径を粗砂 (2.0 ~ 0.2mm), 細砂 (0.2 ~ 0.02mm), シルト (0.02 ~ 0.002mm), 粘土 (0.002mm 以下) を目安として区分した。シルトに細砂が混ざる場合は、「砂質シルト」とした。
- c. 粘性 強, やや強, 中, やや弱, 弱の5段階に区分した。
- d. しまり 強, やや強, 中, やや弱, 弱の5段階に区分した。
- e. 混入物など 土性がことなるブロック, 炭化物・焼土粒・動物骨・礫などの混入物を記載した。混入物の大きさは、最大粒径をしめす。混入量は、「ごく微量」が 2% 以下, 「微量」が 5% 以下, 「少量」が 10% 以下, 「やや多量」が 25% 以下, 「多量」が 50% 以下である。混入土の視覚的な目安は土色帳を参考にした。また、混入物の起源が明確な場合には、その層名も記載した。

## 4. 層名の記載

- a. 基本層序 自然堆積層および耕作土は、ローマ数字で新しい方から I, II, III…と命名した。
- b. 遺構 遺構埋土は、アラビア数字で新しい方から 1, 2, 3…と命名した。試掘坑内で確認した層についても、現地では遺構に準じて命名した (そのうち基本層序としたものは、上記 a の方法により読み替える)。
- c. 層位の細分の必要が生じた場合は、自然堆積層・遺構埋土を問わず小文字のアルファベットを付記して Ia・Ib, 3a・3b…のように記載した。

## 第4節 基本層序

第28号竪穴の将来的な発掘調査を予定しているため、本書ではそこに近接する TP1 の調査結果を基本層序として用いる。下記のとおりである (第2章第2節で詳述する)。

- I 層 (TP1 の 1 層) : 10YR2/3 黒褐色 砂質シルト 粘性弱 しまりやや弱。現生の植物の根や枯葉を多量に含む。焼けた礫が出土。表土層。
- II 層 (TP2 の 2 層) : 10YR1.7/1 黒色 砂質シルト 粘性やや弱 しまり中。現生の植物の根を少量含む。遺物包含層。
- III 層 (TP の 3 層) : 7.5YR2/2 黒褐色 砂質シルト 粘性中 しまりやや強。現生の植物の根を微量に含む。
- IV 層 (TP2 の 4 層) : 10YR4/2 灰黄褐色 砂質シルト 粘性やや強 しまりやや強。上位は土壌化により黒褐色 (10YR2.2) を呈する。漸移層。
- V 層 (TP1 の 5 層) : 10YR7/2 にぶい黄橙色 砂質シルト 粘性強 しまり強 「ローム層」。

## 第2章 調査結果

### 第1節 測量調査

測量調査の結果を、図5、6に示した。図6は2024年度の地表面の測量結果(5cmコンタ)であり、これを北方民族博物館が作成した測量図(20cmコンタ)と合成したものが図5である(青柳編1995)。包蔵地の標高は5.0m～5.8m程度で、1990年代前半に作成された測量図と2024年の測量図のあいだで大きな違いはない。

図5から、2024年度の測量範囲は包蔵地のほぼ中央部に位置することがわかる。この範囲のなかで、2025年度以降に詳細な調査を予定している第28号竪穴は東端に位置している(図5)。2024年度は、この第28号竪穴の周辺に4m四方のグリッドを設定した。2025年度以降、このグリッドを用いて竪穴建物とその周辺の発掘調査を行う予定である。

2024年の測量結果から、北方民族博物館が調査した1990年代にくらべると地表面から判別しにくくなっている遺構がある可能性が把握できる。比較的大きく、深い第28、29、32号竪穴は現在でもよく視認することができるが、より小さく浅い竪穴建物である第18、30、31号竪穴は現地でも地表面の凹みがそれほど明確ではなく、等高線にも明確には反映されていない。測量対象地区の西側は粗い草刈りにとどめたため、その精度を高めるとより把握しやすくなる余地は残されてはいるものの、浅い遺構は徐々に確認が難しくなっている可能性も否定できない。包蔵地の現況は、樹木が大きく成長しているほか、クマザサが高密度で繁茂している。また、多数の倒木も存在している。人為的な改変は行われてきてはいないものの、第2次調査が行われた30年以上前とくらべると地表面の状態はおもに自然的な要因によって一定程度変化している可能性があり、これにより浅い地表面の凹みが確認しづらくなっているかもしれない。

これに対して、地表面からの視認性が比較的良好な、大きく、深い竪穴建物は、それに伴う周堤も地表面から明瞭に確認することができる。ただし、周堤の切れ目は必ずしも明瞭ではないため、地表面からカマドや煙道の位置を推定することは容易ではない。あくまでも第28号竪穴にかぎった理解ではあるが、等高線からは同住居の東南辺に周堤の切れ目があるようにみえ

る(図6)。近隣のシブノツナイ竪穴建物跡では、これまで発掘された事例のなかでは住居の東側にカマドが敷設されている可能性が高いことが判明してきており(湧別町教育委員会2019, 2020, 2021, 2022, 2023)、この点では第28号竪穴の現時点での見通しとも整合的である。しかし、実際のカマドや煙道の位置は、やはり発掘調査によって確認されるべき事項となる。

### 第2節 試掘調査

以下に、2024年度の調査で掘削した2個所の試掘坑の調査結果を記載する。

#### 1. TP 1

〔位置〕第28号竪穴と第49号竪穴のあいだに1m x 1mの試掘坑を設定した(図5、6)。

〔層位〕

- 1層：10YR2/3 黒褐色 砂質シルト 粘性弱 しまりやや弱。現生の植物の根や枯葉を多量に含む。焼けた礫が出土。表土層。
- 2層：10YR1.7/1 黒色 砂質シルト 粘性やや弱 しまり中。現生の植物の根を少量含む。遺物包含層。
- 3層：7.5YR2/2 黒褐色 砂質シルト 粘性中 しまりやや強。現生の植物の根を微量に含む。
- 4層：10YR4/2 灰黄褐色 砂質シルト 粘性やや強 しまりやや強。上位は土壤化により黒褐色(10YR2.2)を呈する。漸移層。
- 5層：10YR7/2 にぶい黄橙色 砂質シルト 粘性強 しまり強 「ローム層」。

〔出土遺物〕1層(表土)と2層から遺物が出土した(表2)。土器はすべて1層からの出土で、6片が確認された。明確な文様や刷毛目が確認できるものはないが、縄文が施されている破片もない。器形や器壁の薄さから、すべて擦文土器の胴部破片と考えられる。石器は、剥片、搔器、礫が1層および2層から出土した。剥片は、1層から出土した黒曜石製の1点のみである(図8.6; 写真図版3.6)。肉眼では黒曜石表面には赤みのある箇所が多数認められ、白滝産の可能



図5 2024年度の調査位置(青柳編1995の測量図と合成して作成)

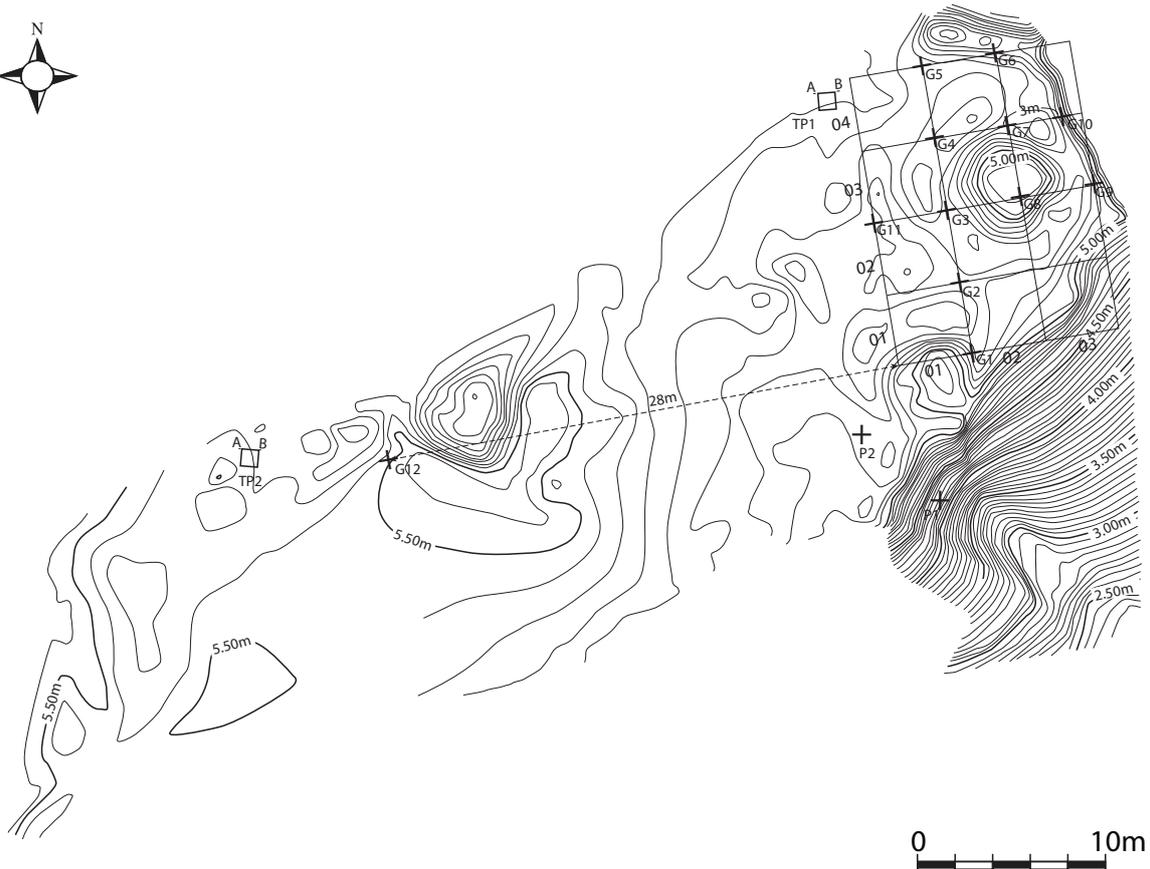


図6 2024年度測量結果

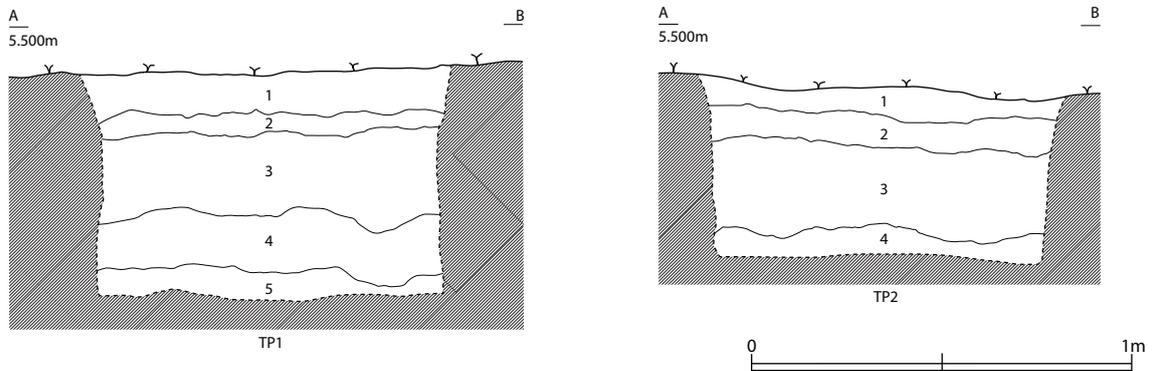


図7 TP1およびTP2 セクション図

性が考慮できる。

2層からは、黒曜石製の搔器が1点のみ出土した(図8.5; 写真図版3.5)。透明感のある薄手の剥片の末端に二次加工を連続的にくわえることで、平面形が弧状、断面形が"planoconvex"を呈する刃部が作出されている。器体表面の一部に黒曜石特有の光沢が消失している箇所があり、被熱していると考えられる。

顕微鏡用デジタルカメラ(Wraymer NOA

630B)をマウントした落射照明付き金属顕微鏡(Olympus BX-FM)により高倍率法の石器使用痕分析(Keeley 1977, 1980; 御堂島 1986, 2005)を実施した。その結果、刃部にOB-Eタイプ、OB-Iタイプが刃部に比較的広く分布しており、その内部にOB-Bタイプの使用痕光沢面が確認された。使用痕光沢面には、縁辺に対して直交方向の線状痕が伴っている(写真図版2.7)。この結果から、本石器は皮なめし

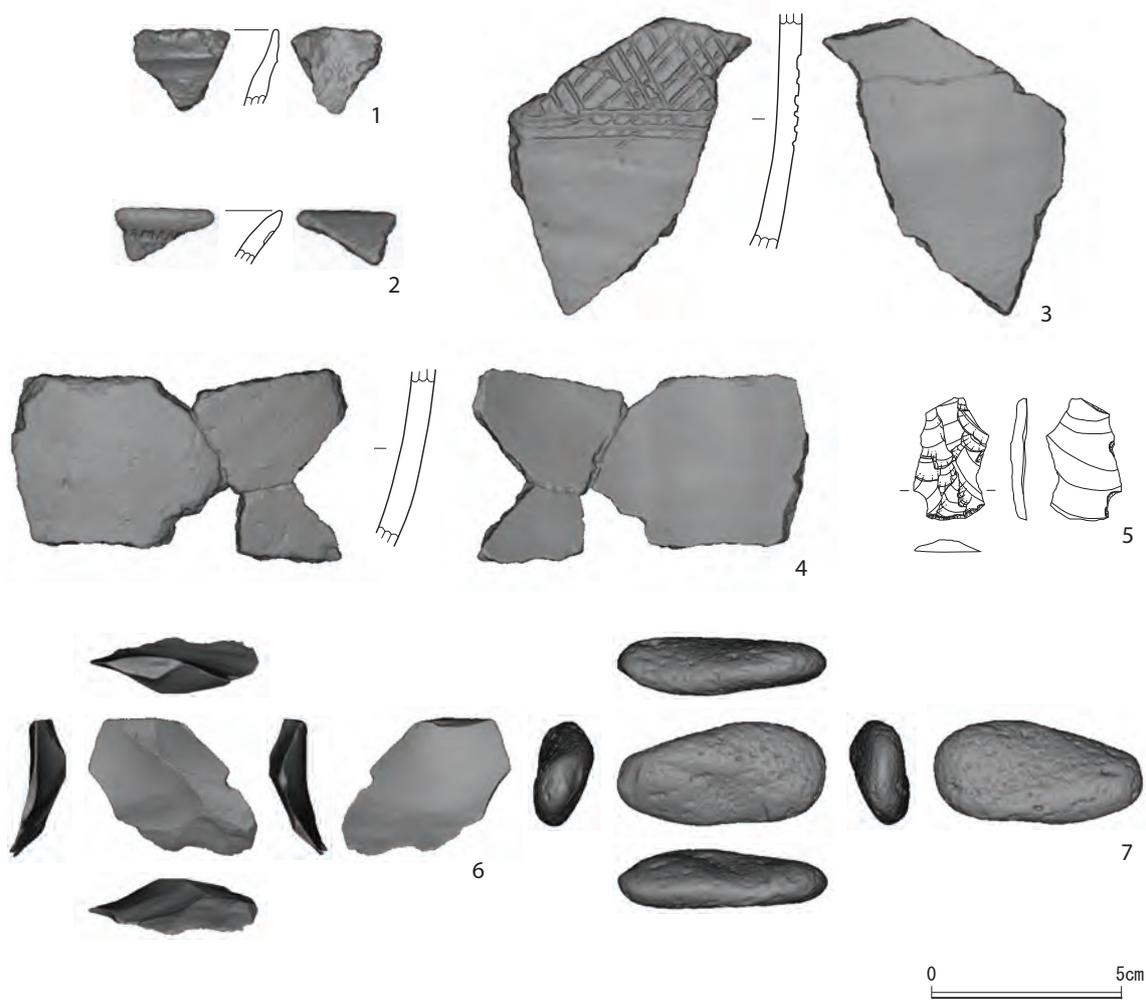


図8 出土遺物(1)

に利用されたと推定される。本遺跡の打製石器はオホーツク文化か擦文文化に帰属する可能性が高い。剥片石器の利用率からみてオホーツク文化期の所産である可能性が高いと思われるが、現時点で年代を決めることは難しい。なお、2層からは細長い枝状の木炭も出土したため、将来的な年代測定を見越して念のため採取している。

このほかの石器5点は安山岩や砂岩製の礫であり、すべてが1層から出土している(図8.7, 9.1, 2, 10.1, 2; 写真図版3.7-11)。サイズは大小があるが、いずれも表面に明確な擦痕や敲打痕は観察されない。ただし、表面が赤色化しているものがあり(図9.1, 10.2; 写真図版3.8, 3.11)、これらは熱の影響によって破損したと考えられる(図や写真は接合後の状況を示している)。時期はまだ明確ではないが、人類によって何らかの目的で意図的に利用された可能性は

高いと判断できる。礫の形状は円形ではなく細長いものが多く、かつ円磨度が比較的高い点で共通性が高い。こうした特徴をもつ礫が河川で選択されたうえで、集落内に持ち込まれ、熱を受けるような利用法や廃棄方法で取り扱われた可能性が高い。

## 2. TP2

〔位置〕第32号竪穴建物跡の西側に1m x 1mの試掘坑を設定した。

### 〔層位〕

1層: 7.5YR2/2 黒褐色 砂質シルト 粘性弱 しまりやや弱。現生の植物の根や枯葉を多量に含む。礫が出土。表土層。

2層: 7.5YR2/1 黒色 砂質シルト 粘性中 しまり中。現生の植物の根をやや多量に含む。遺物包含層。

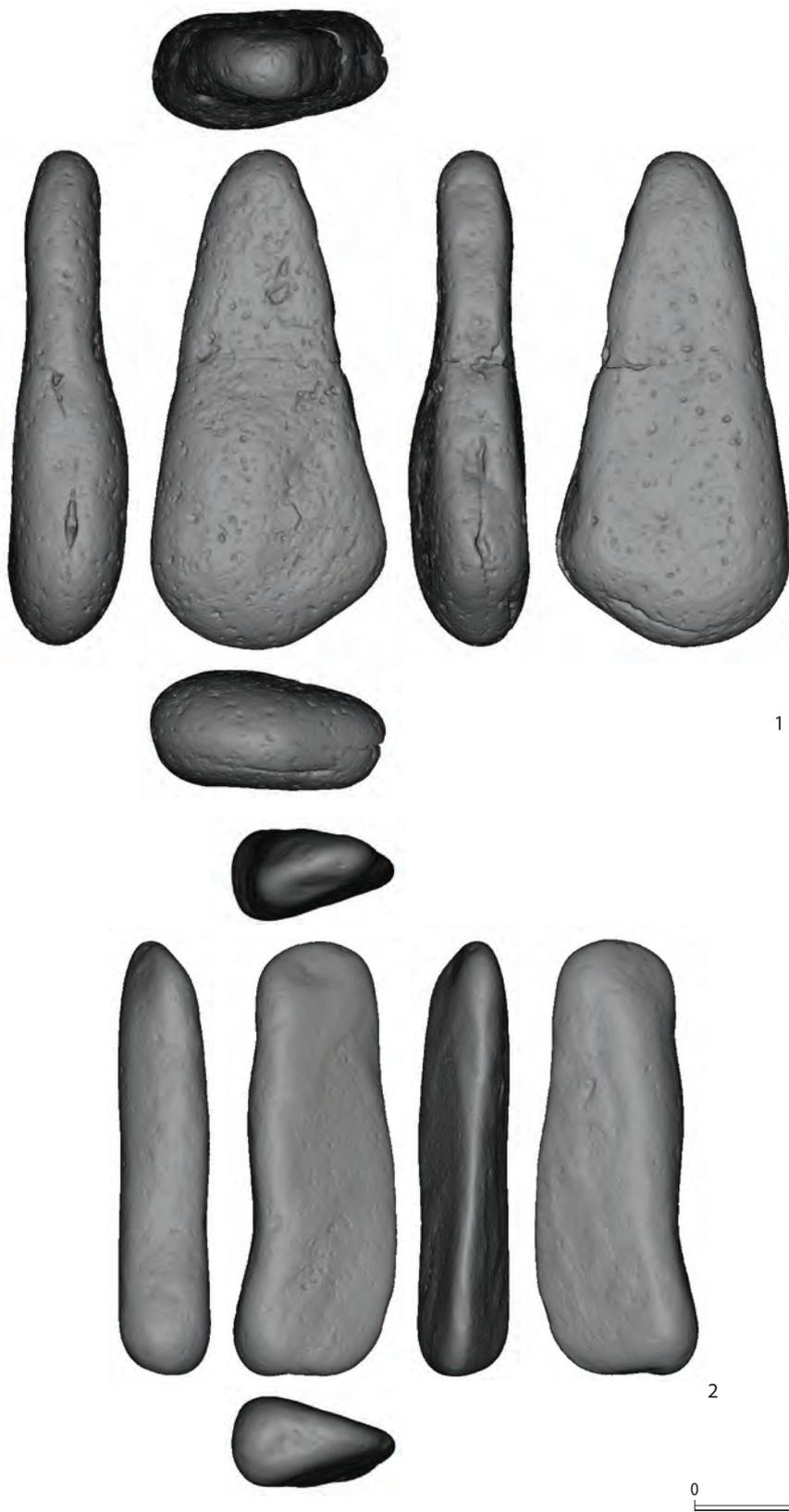


图9 出土遺物(2)

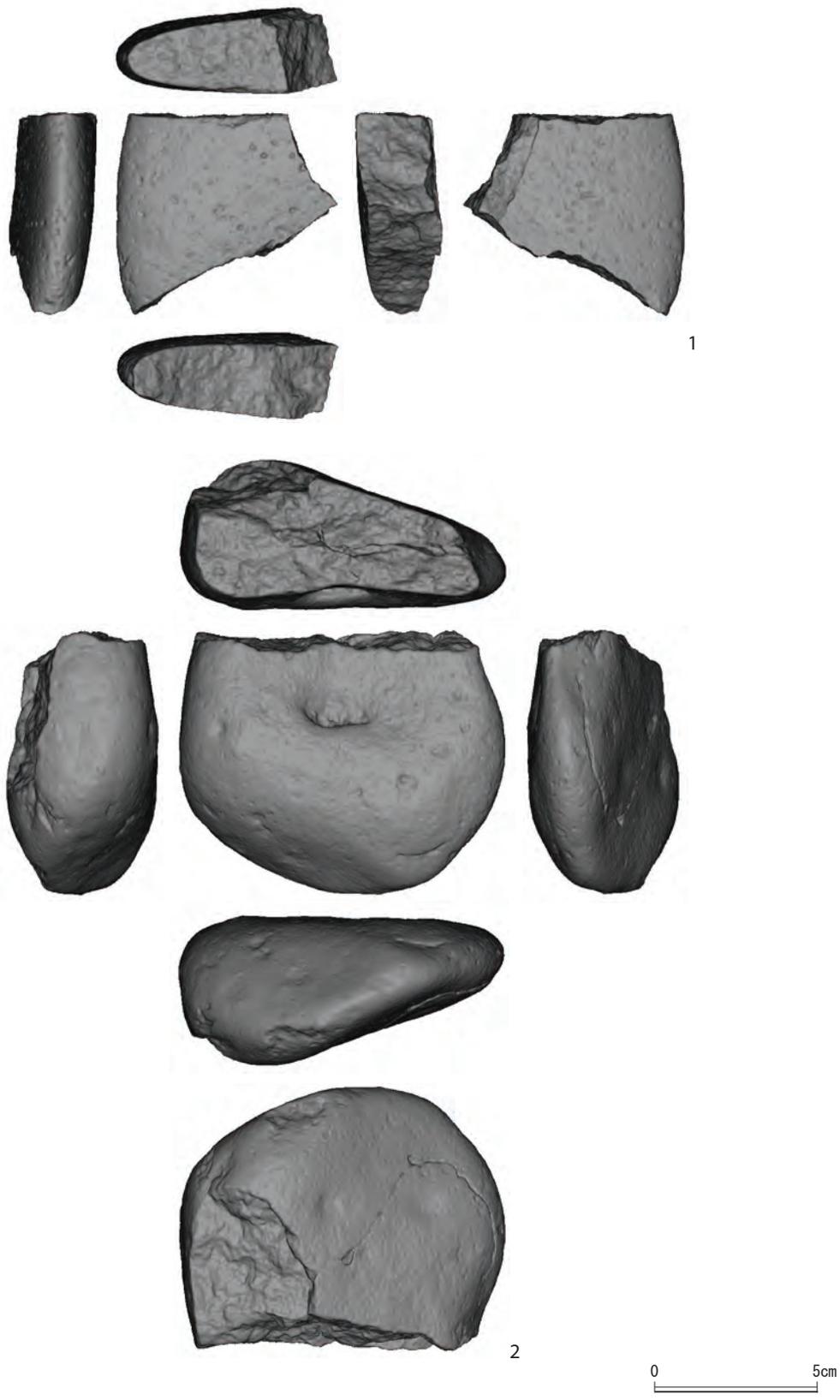


图10 出土遺物(3)

表2 出土遺物一覧

| No.     | 位置  | 層位 | 種類  | 個数 | 器種 | 長さ<br>(mm) | 幅<br>(mm) | 厚さ<br>(mm) | 重量<br>(g) | 材質  | 接合<br>状況            | 備考  |
|---------|-----|----|-----|----|----|------------|-----------|------------|-----------|-----|---------------------|---|
| 1       | TP1 | 表土 | 石器  | 1  | 剥片 | (32.38)    | 46.78     | 9.13       | (8.87)    | 黒曜石 |                     | 図8.6  |
| 2       | TP1 | 2層 | 石器  | 1  | 搔器 | 32.12      | 16.70     | 3.44       | 1.87      | 黒曜石 |                     | 被熱, 図8.5                                    |
| 3       | TP1 | 表土 | 石器  | 1  | 礫  | 56.95      | 27.93     | 12.66      | 24.38     | 安山岩 |                     | 図8.7  |
| 4       | TP1 | 表土 | 石器  | 1  | 礫  | (62.75)    | (68.04)   | 24.86      | (130.92)  | 安山岩 |                     | 図10.1                                       |
| 5, 7, 8 | TP1 | 表土 | 石器  | 1  | 礫  | 150.84     | 70.73     | 35.95      | 388.62    | 安山岩 | No.5,7,8<br>接合      | 被熱, 図9.2                                    |
| 6       | TP1 | 表土 | 石器  | 1  | 礫  | 133.17     | 44.98     | 26.58      | 225.86    | 安山岩 |                     | 図9.2  |
| 9       | TP1 | 表土 | 石器  | 1  | 礫  | (78.82)    | 98.02     | 43.61      | (318.63)  | 砂岩  |                     | 被熱, 発掘時は1個の資料として出土, 発掘後潜在割れにより2つに割れた, 図10.2 |
| 10      | TP1 | 表土 | 土器  | 5  | 甕  | -          | -         | -          | 29.04     | 粘土  |                     |   |
| 11      | TP1 | 表土 | 土器  | 1  | 甕  | -          | -         | -          | 121.43    | 粘土  |                     |   |
| 12      | TP2 | 2層 | 土器  | 27 | 甕  | -          | -         | -          | 164.58    | 粘土  | 3個接合<br>および2<br>個接合 | 口縁部破片2<br>個, 図8.1-4                         |
| 13      | TP2 | 表土 | 土器  | 3  | 甕  | -          | -         | -          | 12.42     | 粘土  |                     |   |
| 14      | TP2 | 2層 | 土器  | 17 | 甕  | -          | -         | -          | 121.41    | 粘土  | 2個接合                |   |
| 15      | TP1 | 2層 | 炭化材 | 1  | -  | -          | -         | -          | 0.41      | 炭化材 |                     |   |
| 16      | TP2 | 2層 | 石器  | 1  | 剥片 | (32.95)    | (58.78)   | 9.59       | (16.89)   | 泥岩  |                     |   |

3層：7.5YR3/4 暗褐色 砂質シルト 粘性やや強 しまりやや強。現生の植物の根を少量含む。上部は土壌化により黒褐色(10YR2/2)を呈する。漸移層。

4層：10YR4/4 褐色 砂質シルト 粘性中 しまり強。「ローム」層。

〔出土遺物〕1層(表土)と2層から土器片が、2層から石器が出土した(表2)。表土からは3点の土器片が出土したが、文様や刷毛目は観察されない胴部破片である。2層からは計40点の土器片が出土した。このうち口縁部の破片や文様があるもの、接合してやや大きめの破片となったものを図示した(図8.1-4; 写真図版3.1-4)。図8.1, 8.2は口縁部の破片である。図8.1には横位にはしる微隆起線文があり、文様に沿ってナデの痕跡もみられる。擦文土器の破片の可能性が完全に排除できるわけではないが、口唇部の断面が尖り気味で、不明瞭ながら口唇部に刻みが存在しているようにみえるため、続縄文後期の土器片の可能性が高いと考えられる。図8.2の口縁部破片には、横一列の絡条

体圧痕文と思われる文様がみられる。比較的薄めの器壁や褐色の胎土も擦文土器とともに浦幌式など縄文早期の土器とも類似しているが、口縁部の器形はかなり開き気味となる点で縄文土器とは相違点もある。図8.3, 8.4は甕の胴部破片であり、8.3には頸部文様帯下半部に沈線による斜め格子目状のモチーフが描かれている。図8.1, 2の土器片の型式論的な位置づけについてはさらなる検討が必要であるが、それ以外の土器片は図示していないものも含めてすべて擦文土器である。

石器は2層から泥岩製の剥片が出土したが、それ以外にツールや礫は発見されなかった。

### 第3章 まとめと展望

川西オホーツク遺跡の第3次調査は、オホーツク文化ではなく擦文文化期の集落に着目する。2025年から数年をかけて第28号竪穴を発掘する計画であるため、2024年はその準備として同竪穴が位置する包蔵地中央部の再測量を行った。また、研究対象竪穴の周辺でグリッドの設定を行い、次年度からの発掘調査にそなえた。

測量の成果は本書図5, 6に示したが、規模が比較的大きく、深い竪穴建物は、5cmコンタでその周堤をも捉えることができる。第28号竪穴の場合、東南側に周堤の切れ目がありそうであるため、この方向にカマドや煙道が敷設されていると予測された。次年度からの発掘調査によって、この仮説を検証する。

包蔵地中央部では、遺跡の基本層序を把握するために竪穴建物が分布しない場所で2箇所の試掘坑の掘削を行った。表土の下には、黒色土、黒褐色土層が堆積しており、漸移層をへて現地表面から50-60cm程度で地山である「ローム」層に到達する。試掘の結果では、表土を除けば遺物はその直下の黒色土から出土しており、第2次調査の成果でも表土直下の黒色土層中から、あるいはそれを切ってオホーツク文化の竪穴建物が構築されていることが明らかになっている（青柳編1995）。

この表土直下の黒色土層がオホーツク文化と擦文文化の文化層と予測され、続縄文文化や縄文文化の包含層にもなるかもしれない。次年度から調査予定の擦文文化の住居跡はおそらくオホーツク文化期のそれよりも新しい時期に建築された蓋然性が高いことから、やはり表土直下の黒色土層の少なくとも一部を切って構築されていることが予測される。周辺の住居の掘り上げ土などとの関係などにより、すべての箇所と同じ状況がみられるとはかぎらないが、実際の発掘調査でこの予測を検証する。

試掘坑からは、土器、石器が出土した。石器は被熱した礫のほか、黒曜石製の剥片や搔器が出土している。これらの石器がオホーツク文化の所産であるのか、擦文文化に帰属するのか、あるいはさらに古い時期のものであるのかは即断できない。しかし、出土土器の多くは擦文土器である。少数の縄文・続縄文

土器が含まれる可能性があるとはいえ、方形の竪穴建物が分布する包蔵地の中央部から北側は、やはり擦文文化の遺構や遺物が高い密度で分布している可能性が高いことが理解できる。

このため、第28号竪穴の床面はもちろんのこと、その埋土や周堤上からも擦文土器が多く出土することが予測される。ただし、竪穴建物構築時の掘り上げ土である周堤の土は、すでにオホーツク文化やそれ以前の遺物を包含していた層からも供給された可能性が高いため、周堤内にはオホーツク文化の遺物も混在していることも十分にありえる。

このような見通しのもと、次年度以降、第1章第1節で列挙した目的を達成するために必要な情報と資料を収集したい。

## Summary

The Kawanishi-Okhotsk site, located in the lower Yubetsu River basin of eastern Hokkaido, lies on a lower river terrace along the left bank of the Sensai River. Initially investigated by local archaeologist Kioe Yonemura in 1960, the site yielded notable tusk figurines of a sea mammal and a bear as well as potsherds and stone tools. These findings identified the site as a settlement of both the Okhotsk and Satsumon cultures. However, due to sparse descriptions in the original site report, the characteristics of settlements during these periods at this site remained unclear.

To address this, the Hokkaido Museum of Northern Peoples conducted excavations from 1991 to 1993, focusing on pit dwellings of the Okhotsk culture. These investigations clarified the number and locations of pit dwellings at the site and attributed the settlement to the later phase of the Okhotsk culture. Although a potential Satsumon dwelling was also excavated, its details were not elaborated in the site report. While these efforts enhanced understanding of this site as an Okhotsk settlement, the nature of the Satsumon occupation remains uncertain.

Our campaign from 2024 prioritizes the Satsumon settlement at the Kawanishi-Okhotsk site. Based on the distribution of square-shaped surface depressions, Satsumon pit dwellings appear concentrated in the site's central and northern areas. In 2024, we mapped the central area containing Pit Dwelling No. 28, targeted for excavation from 2025, and conducted two test pits in undisturbed areas to analyze natural sediment layers.

Findings from the test pits revealed numerous Satsumon potsherds in a cultural layer beneath the surface, with minimal Epi-Jomon ceramics and no Okhotsk pottery. These results strongly suggest a Satsumon settlement in the central and northern portions of the site, corroborating earlier predictions.

## 引用文献

- 青柳文吉 1992「湧別町川西遺跡発掘調査概報」『北海道立北方民族博物館研究紀要』1:77-88。
- 青柳文吉 1994a「湧別町川西遺跡発掘調査概報(2)」『北海道立北方民族博物館研究紀要』3:83-92。
- 青柳文吉 1994b「貼付浮文土器を出土するオホーツク文化の集落跡—湧別町川西遺跡について—」『考古学ジャーナル』371:19-21。
- 青柳文吉編 1995『湧別町川西遺跡—北海道東部におけるオホーツク文化の遺跡調査—』北海道立北方民族博物館。
- 網走市郷土博物館編 1990『収蔵考古資料目録第4集 オホーツク海沿岸の遺跡』網走市立郷土博物館。
- 小林幸雄 1995「銚先先端部に残された赤色系付着物」青柳文吉編『湧別町川西遺跡—北海道東部におけるオホーツク文化の遺跡調査—』:49-57, 北海道立北方民族博物館。
- 小山正忠・竹原秀雄 1967『新版 標準土色帖』農林水産省農林水産技術会議事務局。
- 種石 悠 2015「北海道湧別町川西遺跡出土オホーツク文化の有孔円盤について」『北海道立北方民族博物館研究紀要』24:67-78。
- 種石 悠 2018「北海道湧別町川西オホーツク遺跡出土の金属器について」『北海道考古学』54:141-148。
- 種石 悠 2020「北海道湧別町川西オホーツク遺跡の未報告資料について」『北海道立北方民族博物館研究紀要』29:107-136。
- 西本豊弘 1995「川西遺跡出土の動物遺体」青柳文吉編『湧別町川西遺跡—北海道東部におけるオホーツク文化の遺跡調査—』:59-68, 北海道立北方民族博物館。
- 北海道立埋蔵文化財センター 2015『重要遺跡確認調査報告書 第10集』北海道立埋蔵文化財センター。
- 北海道立埋蔵文化財センター 2016『重要遺跡確認調査報告書 第11集』北海道立埋蔵文化財センター。
- 北海道立埋蔵文化財センター 2017『重要遺跡確認調査報告書 第12集』北海道立埋蔵文化財センター。
- 北海道立埋蔵文化財センター 2018『重要遺跡確認調査報告書 第13集』北海道立埋蔵文化財センター。
- 北海道立埋蔵文化財センター 2019『重要遺跡確認調査報告書 第14集』北海道立埋蔵文化財センター。
- 北海道立埋蔵文化財センター 2020『重要遺跡確認調査報告書 第15集』北海道立埋蔵文化財センター。
- 北海道立埋蔵文化財センター 2021『重要遺跡確認調査報告書 第16集』北海道立埋蔵文化財センター。
- 御堂島正 1986「黒曜石製石器の使用痕—ポリッシュに関する実験的研究—」『神奈川考古』22:51-77。
- 御堂島正 2005『石器使用痕の研究』同成社。
- 湧別町教育委員会 2019『北海道指定史跡シブノツナイ竪穴建物跡発掘調査報告1』湧別町教育委員会。
- 湧別町教育委員会 2020『北海道指定史跡シブノツナイ竪穴建物跡発掘調査概要報告書(2019年度)』湧別町教育委員会。
- 湧別町教育委員会 2021『北海道指定史跡シブノツナイ竪穴建物跡発掘調査概要報告書(2020年度)』湧別町教育委員会。
- 湧別町教育委員会 2022『北海道指定史跡シブノツナイ竪穴建物跡発掘調査概要報告書(2021年度)』湧別町教育委員会。
- 湧別町教育委員会 2023『北海道指定史跡シブノツナイ竪穴建物跡発掘調査概要報告書(2022年度)』湧別町教育委員会。
- 吉崎昌一 1995「湧別町川西遺跡出土の植物種子」青柳文吉編『湧別町川西遺跡—北海道東部におけるオホーツク文化の遺跡調査—』:69-75, 北海道立北方民族博物館。
- 米村喜男衛 1981「北海道紋別郡湧別町川西遺跡」『北方郷土・民族誌1』北海道出版企画センター(1961「網走郷土博物館シリーズ1 川西遺跡調査報告」を再録)。
- Keeley, L. H. 1977 The Functions of paleolithic flint tools. *Scientific American* 237(5): 108-126.
- Keeley, L. H. 1980 *Experimental Determination of Stone Tool Uses: A Microwear Analysis*. University of Chicago Press: Chicago.



遺跡遠景(2023年5月撮影)



第28号竖穴全景(草刈り後)

写真図版 1



1. TP1



2. TP1セクション



3. TP2



4. TP2セクション



5. 測量調査状況 (林勇介氏撮影)



6. TP1調査状況 (林勇介氏撮影)

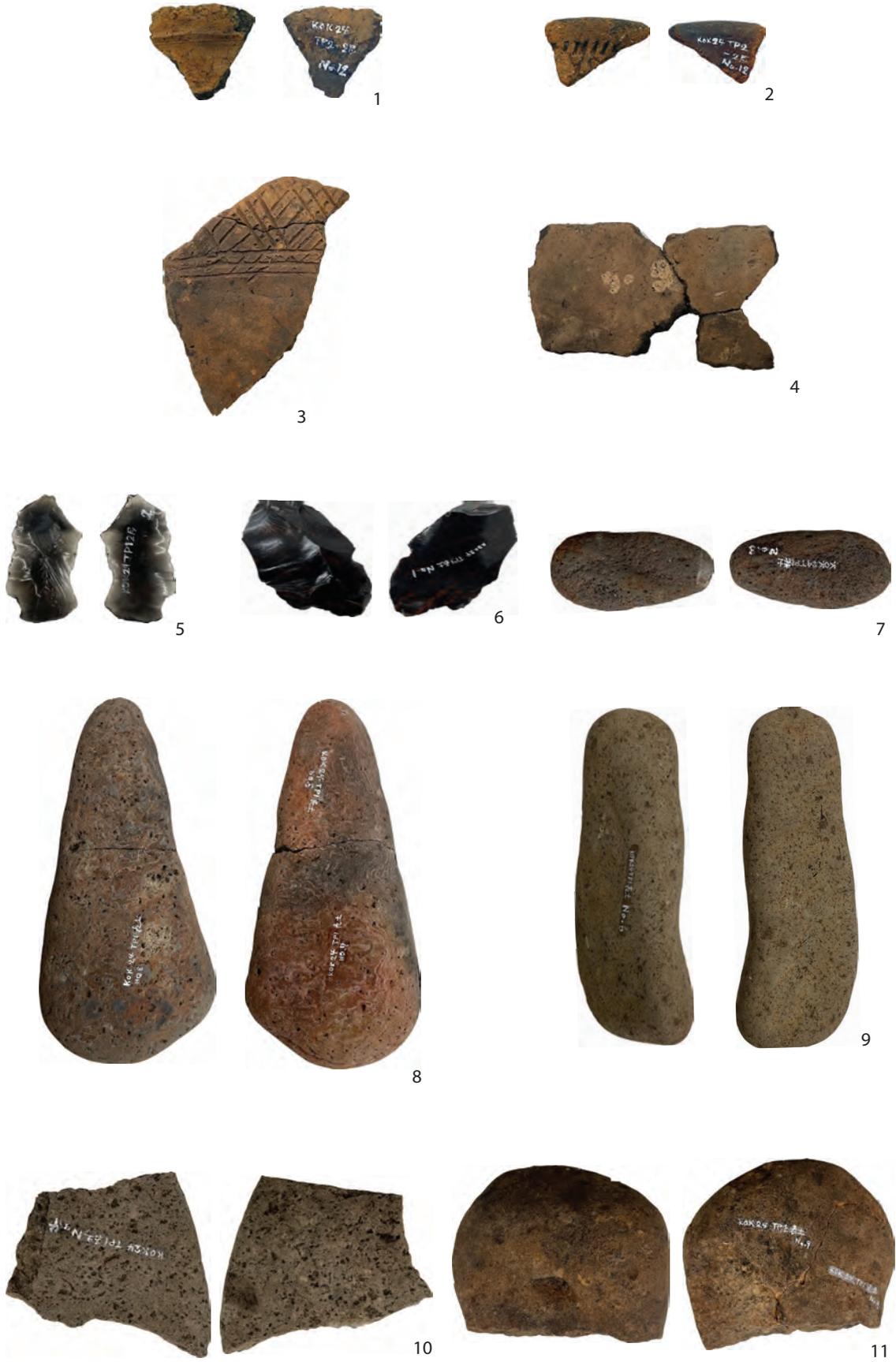


7. 黒曜石製搔器 (図8.5) 刃部の顕微鏡写真 (x200)



8. 遺物保管状況

写真図版 2



写真図版3 (縮尺不同)

## 報告書抄録

|         |   |         |          |      |       |            |                    |      |
|---------|---|---------|----------|------|-------|------------|--------------------|------|
| ふりがな    | ほっかいどうゆうべつちょう かわにしおほ一つくいせきはくつちようさがいほう にせんにじゅうよねん  |         |          |      |       |            |                    |      |
| 書名      | 北海道湧別町 川西オホーツク遺跡発掘調査概報（2024 年）  |         |          |      |       |            |                    |      |
| 副書名     |   |         |          |      |       |            |                    |      |
| 巻次      |   |         |          |      |       |            |                    |      |
| シリーズ名   |   |         |          |      |       |            |                    |      |
| シリーズ番号  |   |         |          |      |       |            |                    |      |
| 著者名     | 高瀬克範  |         |          |      |       |            |                    |      |
| 編集者名    | 高瀬克範  |         |          |      |       |            |                    |      |
| 編集機関    | 北海道大学大学院文学研究院考古学研究室   |         |          |      |       |            |                    |      |
| 所在地     | 060-0810 札幌市北区北 10 条西 7 丁目  |         |          |      |       |            |                    |      |
| 発行年月日   | 2025（令和 7）年 1 月 4 日   |         |          |      |       |            |                    |      |
| ふりがな    | ふりがな  | コード     |          | 北緯   | 東経    | 調査期間       | 調査面積               | 調査原因 |
| 所収遺跡名   | 所在地   | 市町村     | 遺跡番号     |      |       |            |                    |      |
| 川西オホーツク | 北海道紋別郡湧別町川西 516   | 15598   | I-21-032 | 44 度 | 143 度 | 12/08/2024 | 約 2 m <sup>2</sup> | 学術調査 |
|         |   |         |          | 14 分 | 34 分  | ～          |                    |      |
|         |   |         |          | 09 秒 | 33 秒  | 16/08/2024 |                    |      |
| 所収遺跡名   | 種別  | 主な時代    | 主な遺構     | 主な遺物 | 特記事項  |            |                    |      |
| 川西オホーツク | 集落址   | オホーツク文化 | 竪穴建物跡    | 土器   |       |            |                    |      |
|         |   | ～       |          | 石器   |       |            |                    |      |
|         |   | 擦文文化    |          |      |       |            |                    |      |
|         |   |         |          |      |       |            |                    |      |
| 要約      | <p>包蔵地中央部において、地形測量調査と竪穴建物跡がない箇所での試掘調査を実施した。試掘坑から出土した土器片の多くは擦文土器で、明確にオホーツク土器と判断される資料はなかった。方形の竪穴が数多く分布する包蔵地の中央部から北側は、擦文文化の集落であった可能性が高い。</p> |         |          |      |       |            |                    |      |



北海道湧別町  
川西オホーツク遺跡発掘調査概報（2024年）

刊行 2025年1月4日

編集 高瀬克範

発行 北海道大学大学院文学研究院考古学研究室

〒060-0810 北海道札幌市北区北10条西7丁目

